
恋愛観測

淡緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛観測

【Nコード】

N4136Z

【作者名】

淡緑

【あらすじ】

宇宙の意志によって観測者となる為に生み出された思念体ギィノア。

恋に恋した彼は恋の意味も知らないまま、とある世界の傲慢少女に告白の真似事をするが…

無限に連なる平行世界を内包する多元宇宙を内包する多元宇宙を内包する……ややこしかったね、つまり全宇宙を内包しているのが無限宇宙ギイノア・ユニヴァース。

僕はこの宇宙の意志によって観測者となる為に生み出された思念体——全ての次元・時間・世界に干渉してバランスを保ち行く末を見届ける者、そして概念的存在でありながら自我を持った異形な者。名前？——そうだね：取り敢えずギイノアと名乗っておこうかな、そのまんまだけど。

さあ自己紹介はそろそろお終いにしよう、今僕は原点世界にいる。原点世界は全ての平行世界の基盤——いや初期設定とでも言うべきなのかな、この原点世界が分岐して平行世界が出来あがるんだ。

もしかしたら君がいる世界がそうなのかも知れないし、そうじゃないのかも知れないね。

しかも結構条件が緩くてね？未来に何の影響も及ぼさなくても簡単に分岐しちゃうんだから困ったもんだよ。

勿論細胞分裂みたく平行世界も分岐するから実質世界は無限にある、まあ増え過ぎると容量オーバーでパンクしちゃうから一定周期になると僕の独断と偏見で平行世界の6割を削除してるんだ。

これが基本的に観測者の僕が偶にやるお仕事で、普段は原点世界の人間として過ごしてる。

さて話を戻そうか、今僕が原点世界にいるのは最近凄い発見をしたからなんだ。

単刀直入に言うなら恋……そう、観測者の僕が1人の人間の女の子に対して恋愛感情を抱けるという宇宙史に残るであろう大発見。

思い立った日が吉日、早速僕は彼女に告白してみる事にした。

「——何い？高貴な美貌と知性を兼ね備えたこの余と付き合いたいだと？……笑わせるなよ俗物が、貴様の様な下々の庶民では恋人所か

下僕としても余とは釣り合わんぞ。」

高圧的な口調で僕に罵声を浴びせる紫髪紅眼のこの子の名前は…そういうえば未だ知らないんだっけ？

いや、よくよく考えたら喋った事も無いような気がする。

ただ僕の通う学校で一番目立ってたから無性に興味が湧いたのは覚えてるよ。

「あれ？可笑しいなあ…仕方無い、他の女の子に告白してみようか——」

「！…お、おい待て何処へ行く！？」

僕は諦めて近くにいる女の子に声をかけようとしたのに、彼女が震えた声で僕を呼び止めて肩を掴んで来た。

この期に及んで一体何の用だろう？

もしかして罵声だけでは飽き足らずに暴力でも振るって来るのかな。

「何処って…そこにいる女の子に告白しに行こうとしてるだけだよ？」

「っ…！庶民風情が何処まで余を愚弄する積もりだ？絶対に許さん、責任を取れ！」

やっぱり僕に何か酷い事をさせようとしてるし…恋って意外と難しいんだね。

無視して逃げても良いけど何か可哀想だし、仕方無いから話を聞いてあげよう。

「一体どんな責任取らせる気だよ…君達人間はその短い歴史の中で争いは悲劇しか生み出さないと痛感しただろう？」

僕は振り向き様にそう言った。

そしたら彼女は頬を赤く染め何か言いたそうにもじもじとしている、と言うよりは確かに何かを言ってるんだけど声が小さ過ぎて聞き取れないって言った方が正しいのかな？

「――余の…とに…れ…」

「あのさ、何て言ったか聞き取れなかったんだけど…ごめん。」
成るべく彼女の怒りを買わない様に僕は慎重に言葉を選んで指摘した。

でも僕の言葉で冷静になってくれたのかな？

彼女はさっきみたいな無愛想な顔に戻った。

「よ、余とした事が少し取り乱してしまったな…良く聞け俗物、貴様は責任を取って余の恋人になれ！拒否権は無いぞ？良いな…っ！？」

さっきあれだけ僕を貶しておいて何を今更言っているんだこの子は。まあ過程はどうあれ結果が一番大事、ここは反論せずに従おう。

「良いよ。じゃあ早速、恋人同士性こー」

「だ、黙れ愚民！未来永劫貴様になど余の体を触れさせてやらんかな！」

僕は何も彼女の気を悪くする言葉を使った積もりは無い、なのに思い切り蹴られた。

思念体の僕は痛みを感じられない、けど彼女の細い足が僕の体に触れた時に彼女の記憶・感情が僕の中に流れ込んで来て胸が苦しくなった。

それは多分、僕の前では傲慢な態度を取る彼女が記憶の中では独りぼっちで寂しがり屋というギャップの激しさを垣間見たからだと思

う。

この時僕は彼女を幸せにしてあげたい、そんな不思議な気持ちにさせられた。

「知らなかったよ、君がそんなに苦しみを抱え込んでいたなんて：そう言えば僕未だ名前言ってなかったよね？僕はギイノア、ギイノア・ニインナブル。君は？」

「お、おい貴様！名前も知らない癖に余に求愛して来るとは烏滯の沙汰にも程があるぞ！？——まあ良い、余が直々に名乗ってやるから光栄に思えよ俗物？余は高貴なる貴族ミッドハルト家の娘、ロロタル・ミッドハルト。貴様はいつか余の夫となる男、好きに呼ぶが良い。」

確かミッドハルト家と言えばこの世界を牛耳る3本柱の一柱と呼ばれるくらい有名だった筈：それなら彼女が傲慢な態度なのも肯けない事も無いか。

なら呼び方は様付け？

でもそれじゃあ恋人っぽくないし：よし、ろったんにしよう。

何か甘ったれた感じが彼女をじわじわ揶揄してるみたいで面白いし。

「じゃあこれから君の事はろったんって呼ぶよ。あははっ！」

真面目な顔で言う積もりだったのに堪えられずつい笑ってしまった。当然彼女は鬼の形相をして暴力を振るって来るんじゃないかと思っただけど、割と満更でも無さそうな表情を浮かべている。

「むう：思ったより悪くないな。なら余は貴様の事をぎったんと呼んでやろう。」

もしかしてロロタルは僕並に壊滅的なネーミングセンスを有しているのだろうか？

それに彼女の性格が性格だけに真顔で“ぎったん”なんて言う所想像出来ない。

正直この呼び方は気に入らないけど、そんな事を言えば「貴様！余に意見する気か！？」とか言われて怒鳴られるのは間違いないしここは素直に受け取っておこう。

「はは、ありがたき幸せ：じゃあまた明日。」

僕は深々と跪いた後、足早に立ち去ろうとした。

「お、おい待て！貴様本当に余の恋人になる気はあるのか！？」

一体何度僕を呼び止めれば気が済むんだよこの傲慢お姫様は：大体もう恋人になったじゃないか。

「はあ：未だ何か用？」

僕は溜め息混じりにロロタルに問う。

「貴様が他の女に現を抜かさぬよう携帯電話を没収させて貰う。だが安心しろ？余が代わりに燦爛たる物を与えてやろう。」

僕が言われた通りロロタルに携帯電話を渡すと、彼女は勝ち誇った顔をしながら機能性皆無の無駄な宝石が装飾された煌びやかな携帯電話を渡して来た。

今まで僕はこんな悪趣味な携帯電話を見た事が無い、見ているだけで反吐が出そうだ。

多分ロロタルは僕の個人情報勝手に盗み見よう企んでるんだろうけど、そもそも僕の電話帳に女の子なんて一人も登録されてないしロックも掛けてあるから全く以って無意味。

「じゃあ暇な時は連絡するよ。」

僕は心にも無い事を呟いた。

流石にこんな携帯電話では通話する気が起きないよ。

「ほ、本当か!?——ふ、ふん!微塵も期待しないで待ってやる!余はもう帰るっ!」

そう言い捨てて、ロロタルは周りの生徒達を押し退け走り去って行った。

それから僕も帰路に就き、町外れにある古びたアパートの2階にある一室へ入った。

僕、ギイノア・ニンナブルは親元から離れこのおんぼろアパートで一人暮らしを満喫している。

少し話がずれるけど、観測者の僕はこの世界に紛れ込む為に人の記憶と歴史を改変して元々“僕”が存在している設定を作り上げている。

だから僕には戸籍もあるし、血の繋がった両親や親戚もいる事になってる。

勿論僕が大富豪や実業家の息子になって豪邸や高層マンションに住む設定にも出来た。

でも敢えてこのおんぼろアパートに居住しているのはこの管理人さんが何でも世話を焼いてくれるからだと思う。

管理人さんは毎日ご飯を作りに来てくれるし、何より優しい。何処かの傲慢お姫様に見習わせたいぐらいだ。

「♪」

突然僕のポケットに収納してある携帯電話のメロディが鳴った。

「ん?そう言えばさっきから携帯が鳴って——!?め、メール60件以上来てる:!!おまけに全部ロロタルからじゃないか:」

僕がメールの内容を確認すると短い文章で:

『今何してるんだ(//ω//)?』

『無視するとは良い度胸だな俗物ゞ(※、∩、※)ノ?』

『無視しないでよおおお。。。。'。(※／□／※)，。。。』

——等、ストーカーの資質を十二分に匂わせる内容だった。

寒気がした僕が携帯電話の電源を切りゴミ箱に放り投げると今度は部屋のチャイムが数回鳴った。

遂に家まで押し掛けて来たか、そう思った僕は呆れて無視し続けていると扉の向こう側から優しい声が聞こえて来る。

「ギィノア君く帰って無いの？ 晩ご飯作りに来たわよ」

声の主は管理人さんだった。

冷静に考えてみればロロタルだったら扉蹴破つても侵入して来るし少し考え過ぎだったかな。

「すみません。ちょっと宿題やってて…さ、どうぞ。」

僕は慌てて部屋の扉を開け、管理人さんを招き入れた。

「良いのよ気にしないで？ ギィノア君は思春期の男の子なんだから。」

この桃髪碧眼のグラマラスな体系をした女性が管理人さんで名前はエリヴィア・レイバーンズ。

確か19才で県内の有名な大学に通ってるらしい。

「はあ…冗談は止めてください。管理人さんが想像してるような事一切してませんでしたから。」

僕は椅子に腰掛け、机に伏せながらそう答えた。

「あらそうなの？ あ、そういうえさつき可愛い女の子からギィノア君宛に手紙を預かったわよ？ ギィノア君意外とモテるのねえ…私妬いちゃうわ」

「え？」

最初は何かの冗談だと思った——いやそう信じたかったけど管理人さんが本当に『ぎったんへ』とだけ無愛想に書かれた手紙を僕に渡して来た。

恐る恐る僕は封を開けて手紙を読むと、手紙の中央に殴り書きで『明日、昼休みに学校の屋上で待つ。もし来なければ…その時は分か

ってるな?』と書かれていた。

「ねえなんて書かれてたの? ねえねえ?」

何も知らない管理人さんは悪戯な笑みを浮かべながら人差し指で僕の背中をなぞる。

「ああ: えっと、あなたとは付き合えないって書かれてました。」
事情を知られたくなかった僕は書かれてもない内容を管理人さんに伝え、手紙を丸めてゴミ箱に投げ入れた。

「残念ねえ、私はギイノア君の事素敵な男の子だと思っただけど: :
じゃあ私が代わりにギイノア君の彼女になってあげようか?」

管理人さんは世の男達を悩殺するポーズで僕を冗談混じりに誘惑する。

きっとこれが彼女なりの励まし方なんだろう。

「あはは、僕みたいな駄目男じゃ管理人さんとは釣り合いませんよ。」

僕は作り笑いを浮かべて冗談を受け流した。

「そっかそっかあ: : そうなんだあ: : じゃあ今から晩ご飯作るから待っててね? 今日はギイノア君の大好きなカレーライスだから。」

口調はいつも通りなのに、何故か管理人さんは顔が笑っていない。
しかも殺気すらひしひしと伝わって来るし、僕は気に障る様な事でも言ってしまったのだろうか?

「あの、管理人さん。何か怒ってますか?」

「何言ってるの? 私はいつも通りよ? さ、ギイノア君はテレビでも見てて?」

管理人さんにはっこりと微笑み僕に包丁を向けながらそう言った。
考えてみれば僕が管理人さんの冗談を受け流すといつも決まってるんな雰囲気になる。

僕は言われた通り大人しくリビングで夕方のニュースを見ていると台所から包丁で俎板を強く叩き付ける耳障りな音が聞こえたので、僕はリモコンでテレビの音量を上げて対処した。

すると台所から食欲をそそる香ばしい匂いが漂い始め、数十分後には管理人さんが綺麗に盛り付けられたカレーライスを持って来た。

「お待たせ！美味しくなかったらごめんね？」

管理人さんは僕の前にカレーライスを置いて席に腰掛けると、頬杖を付きながら僕をじっと見つめる。いつもは晩ご飯と一緒に食べるのに今日はどうして食べずに見ているだけなんだろうか？

「あの、管理人さんは食べないんですか？」

僕は思った事を管理人さんに率直に質問してみた。

「気にしないで？私今ダイエット中だから。」

「ダイエットなんかしなくても管理人さんは十分細いのに…じゃあ、頂きます。」

納得の出来ない疑念を抱きながらも空腹だった事もあり、僕はカレーライスを食べる。

相変わらず管理人さんが作ってくれたカレーライスは美味しい。

「どう？美味しい？」

不敵な笑みを浮かべながら管理人さんは僕に問い掛ける。

「はい、とっても美味しいで——あれ？何だか急に眠くなって…」

突然睡魔に襲われた僕は椅子から転がり落ち意識を失った。

それから一体どれくらいの時間が経過したのか、僕は目蓋の裏に眩しい光を感じて目が覚めました。

尿意を催した僕はトイレに行く為に立ち上がろうとした時、ある異変に気付く。

見慣れない家具や何かのキャラクターのぬいぐるみ…おまけにベッドに体を縛られて動けない。

僕は自分の置かれた状況を整理して必死に昨日の出来事を思い出そうとした。

するとフライパンを持った管理人さんが扉を開けて部屋に入ってきた。

「ギィノア君おはよう。昨夜は良く眠れた？」

そう言いながら管理人さんは乱れた僕の服装を整えてくれた。

「あの、管理人さん。ここは何処ですか？それに昨日僕は…」

「覚えてないなんて酷いよ…昨日ギィノア君にあんな恥ずかしい事されたのに…」

管理人さんは頬を赤らめながら、上目遣いで僕を見つめる。

もしかして僕は昨日、彼女と過ちを犯してしまったのだろうか？

いや、そんな筈は無い。

きつと管理人さんは睡眠薬入りのカレーライスを僕に食べさせたんだ。

「僕は騙されませんよ。どうしてカレーライスに睡眠薬を入れたんですか！？」

僕は我を忘れて管理人さんに詰め寄る。

「だってギィノア君全然私の気持ちに気付いてくれないんだもん。だから私決めたの、あなたを私だけの物にするって。」

成程…つまり僕は彼女の歪んだ愛情で監禁されている、と言う訳か。それにしても原点世界の女性は皆恐ろしい性格だ。

「あの…好い加減漏れそうなのでこれ解いて貰えませんか？」

縄を解いて貰う口述では無く、僕は本当に失禁しそうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136z/>

恋愛観測

2011年12月24日00時48分発行